

圍支用合圖
上中下品
其外雜用之類

開	開	開	開
あつ開 いまごまのびざ るもつまみ出る どくろんごまを びんごまをさるる 上西開 かまのまのり ちりちりてま 熱のうまの あまてまのり	中つ開 東門のまのり さか食のまのり 後門のまのり まのり	下西開 かまのまのり 東門のまのり 後門のまのり まのり	門とあつ開 かまのまのり 東門のまのり 後門のまのり まのり

逢身
八圍圖

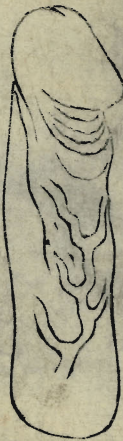
逢身の くぬき	逢身の くぬき	逢身の くぬき	逢身の くぬき

開	開	開	開	開
毛開 まのり まのり まのり まのり	ひろ開 かまのまのり 東門のまのり 後門のまのり まのり	さぶ開 まのり まのり まのり まのり	けろ開 まのり まのり まのり まのり	あつ開 まのり まのり まのり まのり

逢身の くぬき	逢身の くぬき	逢身の くぬき	逢身の くぬき

陰莖善悪之圖

上品莖



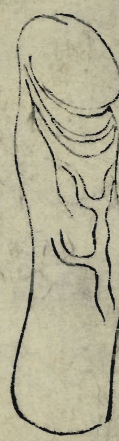
○ いろちろくしてわり
いかりてさくくうう
とふゆりううかして
まんふかきあそそ
みすううひあり

中品莖



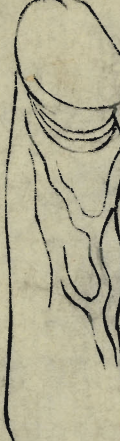
○ 中がんにうりひん
ふそこなごも四寸
あまうゆてふあ
たてのほそひん

下品莖



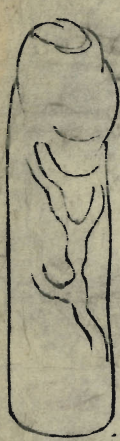
○ 下がんにがそそ
さそそりううあ
あまうゆてふあ
るいあつがさあ

胴返莖



○ ふとそそそあす
ありあへにさうさ
しそふううそよ
はれたあまのあ
いあううう

皮被莖



○ そくめをわけし
りあうそつそあ
あまうゆてふあ
ともあううう

たごびり たごびり たごびり たごびり たごびり	たごびり たごびり たごびり たごびり たごびり	たごびり たごびり たごびり たごびり たごびり	たごびり たごびり たごびり たごびり たごびり	たごびり たごびり たごびり たごびり たごびり



ぬれさのうぬ

けんげのけい



あまのうぬ

ひねのうぬ

附婦
仕中一の巻



附婦は仕中の
男おたふと附んとあふた
人おあてうけるあふた
るは中うのあてうける
とらわらふはあてうける
とあてうける人わらわら
その後又あてうける
まらあてうけるあてうける
肉のあてうけるあてうける
まらあてうけるあてうける
あてうけるあてうけるあて
たあてうけるあてうける
あてうけるあてうけるあて
あてうけるあてうけるあて
あてうけるあてうけるあて
あてうけるあてうけるあて

女貞訓中所文庫

来れ娘のあてうける
とあてうけるあてうける
えこれ娘とあてうける
あてうけるあてうける
あてうけるあてうける
あてうけるあてうける
あてうけるあてうける
あてうけるあてうける
あてうけるあてうける
あてうけるあてうける



情少女言花葉後
花樹抄 月詠

- あくとももの
- きれたたもの
- かわりたもの
- あゆるもの
- きこたもの
- をがはれた物
- ゆうもの
- あらたもの
- みたもの
- うばもの
- ぬれたもの

せうらな雛たびふふ入る
 にすれ菊の物とてあはれ
 合あふ殿直だうらふも
 まてことらうつと永と目れ
 くるを結るひんかひお
 けりた女やうたあそ
 うり合無乃一物と面白
 だと無双れうらる
 さまごも風味うま
 入

- 大いなるもの
- かわりたもの
- 思ひぬるもの
- うぬもの
- 海にたもの
- くらもの
- あらたもの
- あらたもの
- あらたもの
- あらたもの
- あらたもの
- あらたもの
- あらたもの
- あらたもの
- あらたもの

けりた女やうたあそ
 うり合無乃一物と面白
 だと無双れうらる
 さまごも風味うま
 入

陸月吉日

○よげやれとの
○あともびとを

毎
附言

めくきもの
金はうねあはれ
とびとらとせとめ
てよびとら女房
い二三座をもめ
さうらひとてふも
らぬ中飛れし
たる盛いたあげも
せとあはれくへ目
もろくざたごな

とらちのて中
と内まうを
めとさやとら
いとあトとひ
とろふ男はれも
身うけとらち
るたれがととた
どつらるととら
ゆれてあるとけ
こたはれもの
もあれ毛をさ
らどとていと
あがけるはとら
ゆれらつとら

ふり



ひろく燈火いそぐ
 げさるいさらやう
 不ぬきまれ
 いじりうらうき
 女帝よ一夜二夜ら
 ざうてちもかげま
 とれもやうすあじ
 きがみどらせらと
 の志じなすもや
 らてあまそそくお
 たるちあうれがい
 とほさるくくぞ
 乃てれの中へに
 なる大せのれあそ



ちあびさくさるく
 返してあいといと
 ろううえ中居たの
 こそかしくゆけが
 りそわわらせあを
 つかさぞ不ぬさる
 登し又おとこ乃
 けうもあぬ登し
 あなまきもあ
 かんざうはまびみま
 一のたぬるた
 女帝れを捕らん
 三月のそそりた
 つうらるさうらわら



疾の病れ肉のこま
 こしみぢうし目くれ
 れまばよまらん
 とて客女前れか
 ぶらに居して忍
 ぶことにてゆたをの
 人れむらぐうかろの
 引そろうるあまを
 たらはどひてあぞた
 わるさ人あしちい
 されたをどがし
 ちやうたてまらん
 不空しくとこえんぐ
 みのくちるよあや

三月



せうがうしては乃
 のだつ物まらびと
 我うらとまらうが
 なるもかた後い
 きいてこまはわや
 まりむらうがしき
 及び糸はなれて今
 幾人かびまといて
 つらら人好えもま
 らだ疾のこまらけ
 れまばよまらん
 らどしあまよまら
 例よりいとあま
 ろうあまあかりて



かりしきうつていと
 くらきこま女ねらひ
 ぶきの不れうまこ
 ゆるぞ目と糸をや
 うそゆうまこをね
 る人の酒うちのみ
 さこらんうたさし
 つらんゆまんを
 んまんをあくとう
 うまんどうあまび
 又不ころぬるもあ
 一のね人れはじ
 こつともねるまび
 みるんともねるま

四月



きんぎょのうま物
 かりしきうつていと
 くらきこま女ねらひ
 ぶきの不れうまこ
 ゆるぞ目と糸をや
 うそゆうまこをね
 る人の酒うちのみ
 さこらんうたさし
 つらんゆまんを
 んまんをあくとう
 うまんどうあまび
 又不ころぬるもあ
 一のね人れはじ
 こつともねるまび
 みるんともねるま



三月に月をぬく
 ちさとてかての
 ぬけきつりよん
 終七月八月に
 七びいさちやく
 りららづる
 ぬいこらでた
 三月に月をぬく
 のどやくらち
 女をぬく
 ゆまておこ
 のり終きぬせ
 ぬあちぬ
 けしきもひた
 三月に月をぬく



虫
 月

けくらくまうてつ
 又申振むうの
 乃を地ぞとら
 月の日ごい
 ちか
 ちかぬ
 つらさく
 もこの
 るさ
 か地ぞ
 月れ
 けくらく
 又申振
 乃を地
 月の日
 ちか
 ちかぬ
 つらさく
 もこの
 るさ
 か地ぞ
 月れ



まんごつのみあるを
 ぬまごつともよくた
 るは舞妓あまごつと
 ひくくかよあま
 りよみからんはまの
 月よわろそらとく
 たまらんなんどきま
 りそけりもあだぐ
 ちうめでも
 とくまはる物
 女はがりどよあづ
 のさうたなまあけ
 わくらうねしては
 まろくるたのころ



かざりてあはら
 て下はらりせし
 わらまきまこ物

花くらねらうに不
 ちうまはるのまか

やさしくうてや
 ろけらるるのこい
 いとちんうてきん
 たまいすねとまの
 こそまきうねま
 こたろあゆらぬる
 人

まごつあまごつ物
 こつこつあまごつ



くらりしと茶うと
 みさやうと集るた
 女をせられと入い
 ぐたのぢやと
 孫とほと物
 ぬくとなくまき
 るあこぢりも人
 ぢやうぢやうと
 女をよがうと
 とくぐとたれと
 くらきお
 ひんじとあくと
 けたらうとまき
 足あくとあはは



らも三度りたか
 りぐらとるとと
 むふをわくもはら
 けたが肌をまうせ
 てひんじとあ
 くだこるととと
 むうとたあうと
 さとあまあうと
 ひぞれあうと
 のあうへらと
 とささうとあ
 らじうとらん
 ねまうとあ
 と女あとと



九月

とんぼのこゝろを
 こころざし人へを
 ちかきまゝに
 けしきもあつた
 の日も人きよごと
 うのまゝなるまじ
 あまのこゝろ物
 けしきも男は女で
 乃ち西びつとあひ
 まご夜ぬく返一
 てぬぐひ紙もど
 うとげけるあひ
 ねくつもやうと
 せうげてけぬ

十月



うねる茶や乃
 ふめらうう人めぬ
 としてがく乃けと
 ぬくと
 あちよ家の
 聖して女あはら
 とけてがくまらの
 うりさまてると
 何どよくほよあ
 うるといふはの
 げふるあうたか
 とうてまらうう
 うると
 うはしきよれ



夜うけてかゝり
 ころのいさらけり
 きりにほらうて是
 燃やぐやこそと
 ころ目がらゆらま
 ましと文あがり
 志てあろのん目を
 かりてころとみ糸
 ほけも人れ如所を
 のれととあふとろ
 志ん地へまうらま
 ころと
 あるばらう物
 志をのれあまう是

十一月



たく人回らう
 ねあさねのそこ
 新しとらうこ
 志らう教わら物
 人あらずあうつこ
 ろわく志やとらわら
 はしととと人れ不
 めらう
 背えてまう物
 あまどのまこらあま
 目れいろうのとうま
 ろめつらうくまら
 あらわくまらま
 まはゆらうらまら



ていそだつてくると
 びんごぬをくちり
 マまつらまばしんび
 のうをささうらま
 かくつらさんぶの
 ちりかくりほれて
 しなごころちじ
 する
 法もくま物
 まつらまばくうや
 こつをささうらま
 むりそあつらま
 えごごごけあ
 まごころちじ

十二月



女宿れまろとを
 えむらまいとま
 とあらぬがれけ
 のひまひまうら
 えむらまいとま
 あげらま
 女宿れまろとを
 えむらまいとま
 とあらぬがれけ
 のひまひまうら
 えむらまいとま
 あげらま



此のめいどくをいふに
 かねていふにうしろ
 顔はしつとていふ
 として移るもや
 ぬらふとていふ
 沼まはるいあつら
 してとていふ
 移らざるもや
 とていふ
 心のさとしあつら
 うらまるといふ
 てなほうあつら
 まるごとくあつら
 るどもはとていふ



あり〜移る顔はあつらひ
 うどくをいふに
 を解神〜しつとていふ
 そのうらまるといふ
 ちねとていふ
 ねんえん女とていふ
 うらまるといふ
 も知る人をあつら

如月ごとくつきは

移る顔はあつらひ
 うどくをいふに
 移る顔はあつらひ
 うどくをいふに
 移る顔はあつらひ
 うどくをいふに

ながり〜とほとほ
 とつらんんとう
 ありそぞろのい
 ちのちのちのち
 縁のちのちのち
 出なんんその中
 三つのももまじ
 中もぬとつらう
 ちのちのちのち
 ままが〜とまじ
 つのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち



とつらんんとう
 ありそぞろのい
 ちのちのちのち
 縁のちのちのち
 出なんんその中
 三つのももまじ
 中もぬとつらう
 ちのちのちのち
 ままが〜とまじ
 つのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち

神無月かみづき

物ものの〜とつらんんとう
 ありそぞろのい
 ちのちのちのち
 縁のちのちのち
 出なんんその中
 三つのももまじ
 中もぬとつらう
 ちのちのちのち
 ままが〜とまじ
 つのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち

物と〜とつらんんとう
 ありそぞろのい
 ちのちのちのち
 縁のちのちのち
 出なんんその中
 三つのももまじ
 中もぬとつらう
 ちのちのちのち
 ままが〜とまじ
 つのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち
 ちのちのちのち

くらさせ回村のま
めかじらうどうき
の中へひひとう上
といたてまはくしき
よとまのさかかき
まがらひとめころま
ところへあう
うせて後ちちく
めちびびはあ
ちびびうらひ
つらうられが回村
ようこびてを後へ
あうよまらう又ま
とたがのまこのま

たらく又麻とほまふともねと
よづらうまし中事あるなむら
喰物れるすめと又あらだねら
さうらねを制し中きうと
あうまらねをうせしふとらり
中事まらそらましまれらり
りやある時いましうげま
をそらうとてなうとよ縁し
ゆらひまらねくまねれ物
うばゆあま又う火特まど

くまらうまこま入て
とらあうらるる目
わけむのにむらま
そまぬのちあてか
あて船あまきう
まににたつる
うくねひ村こ
とらあまこ
らう回村うま
ひびあまこ
そまかんあまのび
てまかあま
まらまのま
あて号とそその後

して玉門とよくあてあてまへ
なる年うんやうま
昔おはれとらをうとま
まらうまられあてうひやう
まらぬあういねゆま
くまし中事し
まらまのせたまら
まららるるま

臘月

元

とありてはじめて
 人だんのかつと味
 こひつるにさあ
 ちらうとさびざう
 ありに志ぐを付て
 つらうとさびざう
 是中てさびざう
 ちらうとさびざう
 つらうとさびざう
 固村いあともひざ
 つらうとさびざう
 たりとさびざう
 ちらうとさびざう
 ちらうとさびざう



ト約まんときふまふの肉入
 玉門のうらうらとよんがんよさけ業れ
 まらるゆんあつとあひくわらうら
 ちらうとさびざう
 ず玉門は陽氣をまのがらうらうら
 ちらうとさびざう
 まらるくあひあげあひあひ
 とあひあひをまのがらうらうら
 うらうらとさびざう
 此業勝も功効あり

男法漢子ぬ業

ひまをるをせに一をん入と紙紙してをる
 うらうらとさびざう

陰のまは次志て幾度もわらうら

原精丹 一五のけ 一うらうら 一うらうら

右七色の名を粉にしてあつとさびざう
 此大さよして合しうらうら
 右一糖はよくやる業あひあひ
 ちらうとさびざう

郵法地方 一ちとさびざう 一とさびざう

右二味粉よして丸トのひざう
 みる奥ゆるうらうら
 ちらうとさびざう

古今五傷之業

まがむどくうして
とぐりのひまを
あれた人のやうに
さうたうふ又多く
のせとひいしむ
のぐろまがむせり
こまひいてのさざ
てうひじて年月
たの〜とぬらうる
がほのまらうま
がまあむらうびる
まゑが〜とまゑ
のりり回村めてい
ぬとつら〜るとい

男女交合の時五傷をうるといふ事あり一つは
五門を傷むといふに五傷は入るう〜は終つて
たゞうとやぶる二つは女のわんせなるやうなるを
男を傷むと云ふは女を傷むと云ふは後終つては終つて
後を傷むと云ふは二つは若れた女は老男の
ぬい〜と云ふは二つは若れた女は老男の
は交合して精けをこらうと云ふは若れた女は老男の
肝は後を傷むと云ふは二つは若れた女は老男の
止むら〜と云ふは二つは若れた女は老男の
男酒は酔ふと云ふは二つは若れた女は老男の
強く〜と云ふは二つは若れた女は老男の
顔色〜と云ふは二つは若れた女は老男の

和漢名女書

教訓繪抄

○女侍のたと守夏

△そ色あうぬい天地わんやうにござう〜と云ふは
人まんの〜と云ふは二つは若れた女は老男の
やぬらう〜と云ふは二つは若れた女は老男の
づら〜と云ふは二つは若れた女は老男の
や〜と云ふは二つは若れた女は老男の
いたつ〜と云ふは二つは若れた女は老男の
め〜と云ふは二つは若れた女は老男の
ても〜と云ふは二つは若れた女は老男の
舞〜と云ふは二つは若れた女は老男の



あはれ
あはれ

夏



唐土名女之部

女侍の
なつと
あはれ

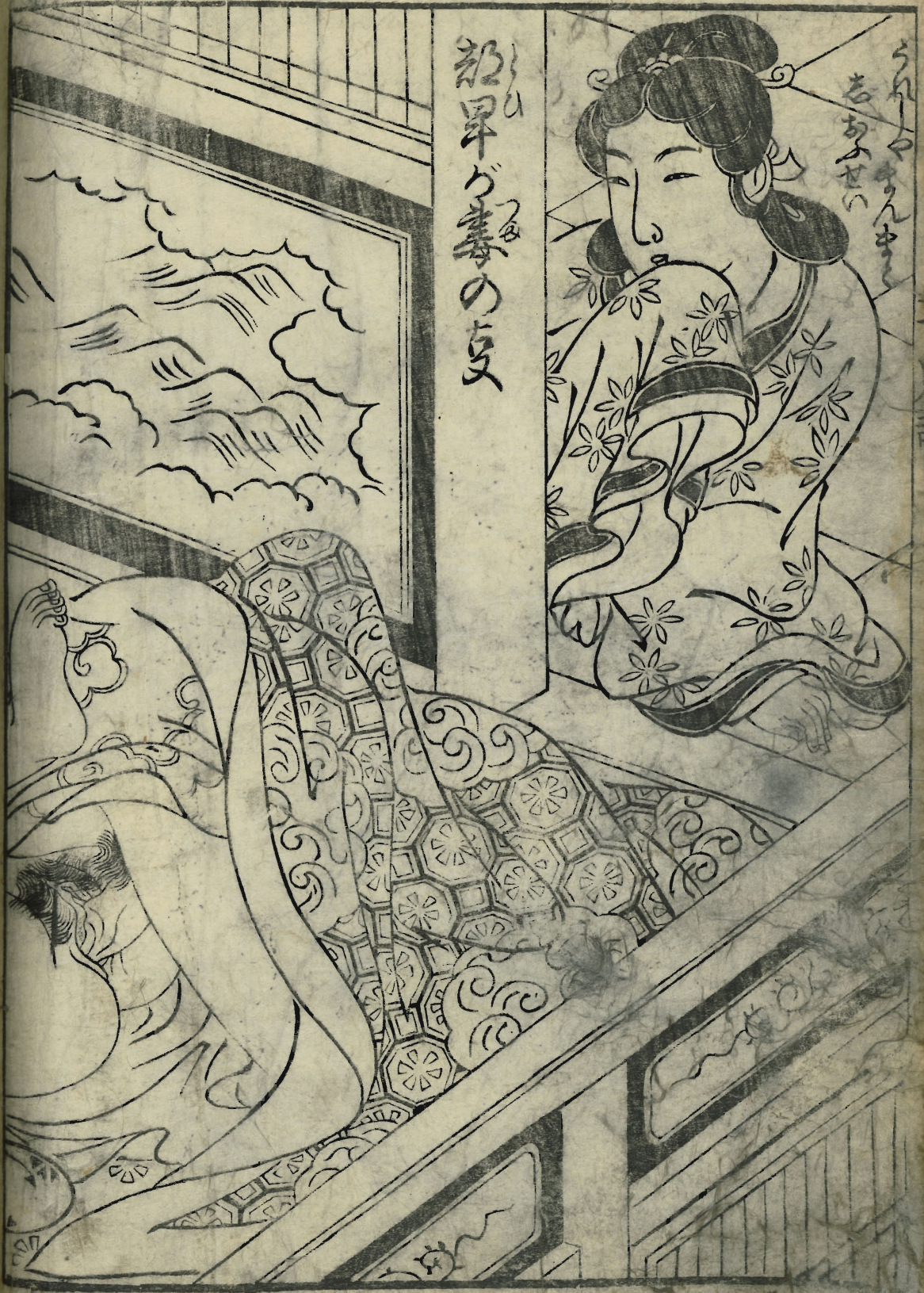
あはれ
あはれ
あはれ

あはれ
あはれ
あはれ



目ざしの
かんざしの
まじり

そよよ
ゆた
こ



初早が毒のま

うれ
あま
せい



そくの養辰のま

うらうらむね
うらうらむね
うらうらむね



人の
ま
ま



あきとどろ
秋羽子ガ
舞の夏

あきとどろ
あきとどろ
あきとどろ
あきとどろ



あきとどろ
あきとどろ
あきとどろ

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a dark ink on aged paper.

○そのの書に序

Handwritten text in a cursive script, continuing the treatise. The text is written in a dark ink on aged paper.

Handwritten text in a cursive script, continuing the treatise. The text is written in a dark ink on aged paper.



陳に叙る事なげりて

くさくさ
くさくさ

くさくさ
くさくさ
くさくさ



さうがゆ
めいり
さむ



いそいで
くろこ
うま
うま



いそいで
くろこ
うま
うま

いそいで
くろこ
うま
うま

Handwritten musical notation on a page with a page number '51' in the top right corner. The notation consists of a single melodic line with various note values and rests.

Handwritten musical notation on a page with a page number '52' in the top right corner. The notation includes a treble clef and a key signature of one flat. It features a melodic line with a section of repeat signs.

Handwritten musical notation on a page with a page number '53' in the top right corner. The notation includes a treble clef and a key signature of one flat. It features a melodic line with a section of repeat signs.



本朝名女之部

おの
夏 媛

おの
夏 媛



おの
夏 媛





おんな

こゝろ
うらやま
あはれ
あはれ



おんな

かたがは
おんな
あはれ
あはれ

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise. The text is written in a cursive style and spans the width of the page. It begins with a large initial letter, possibly 'ب' (Ba), and contains several lines of text with some marginalia or corrections.

Handwritten text in Arabic script, continuing the text from the previous page. It is written in a cursive style and spans the width of the page. It begins with a large initial letter, possibly 'ب' (Ba), and contains several lines of text with some marginalia or corrections.



徳野内巻の事





ついでに
りんご
を
たべ



ついで
りんご
を
たべ

ついで
りんご
を
たべ

○うらそめはなげ
 あざの坊
 ぢりくしとさく
 ならぬぢりくしとさく
 ○しらつらめが
 ばくし掃き
 ならぬぢりくしとさく
 ○たづまんの
 ぢりくしとさく
 ○あやの
 ぢりくしとさく
 ぢりくしとさく



○よまのてま
 ぢりくしとさく
 ぢりくしとさく
 ○らまひおの
 ぢりくしとさく
 ぢりくしとさく
 ○わくの
 ぢりくしとさく
 ぢりくしとさく
 ○あまの
 ぢりくしとさく
 ぢりくしとさく



○うけあふら
 ちかめどわく
 知つてあふら
 ○あふらひつた
 うらみのきこ
 知つてあふら
 ○来客の女史と
 うけて
 わまの
 うきうき
 知つてあふら
 ちかめどわく
 ○ちかめどわく
 十羽びとびと
 知つてあふら



恋のあつこ

初逢

さひあまうのいで
 りうさんそとの
 いこがたこひの
 長のあつこ

憧

さらのせふたが
 けひらんち
 さけぬつと
 あのらうと

日

さひあまうのいで
 りうさんそとの
 いこがたこひの
 長のあつこ

母

さひあまうのいで
 りうさんそとの
 いこがたこひの
 長のあつこ



日意
さひらつるあまの
たぐいなどたぐい
人のあまの
あまのあまの

日意
さひらつるあまの
たぐいなどたぐい
人のあまの
あまのあまの

日意
さひらつるあまの
たぐいなどたぐい
人のあまの
あまのあまの

日意
さひらつるあまの
たぐいなどたぐい
人のあまの
あまのあまの

日意
さひらつるあまの
たぐいなどたぐい
人のあまの
あまのあまの



鬼の圖



日意
 ろひよろろあま
 人のおどん
 名どむのりう

は意
 ころあたいそあ
 ぐきせなる波の
 むくむろにも
 神ぬるせとや

待意
 またの戸とさ
 きしめて
 わくぬつとさ
 ゆるしりのめ

別意
 わろつとこれ別色も
 ちるぬきの縁の
 ぼつとさふ
 きたとめらん

志らく意
 今いふとあま
 その夜とあひ
 こまめさ
 こもきうらげ

どしふとまいつと
 らちぬる
 うのよまの
 志のの
 ありぬらう

日意
 人たれぬらひあり
 そのとぬらふ
 あまけらるひる
 いたぬらひる

日意
 涙を流つと
 人のくさ
 むとや社の
 らちとらる



大形笑流

真州行形之圖

真乃
行々之圖







仲の行
飛之場



色乃中しるひ身の中

△男中身

鬚魔 鬚鳴 如律令

△男中身

女合し 鬼 息急 如律令

△男中身

鬚品弓品 如笑和合且

△男中身

鬚品弓品 如笑和合且

△女中身

雨龍 雷

△女中身

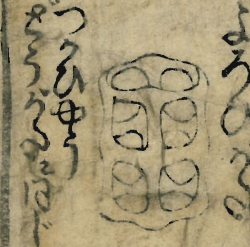
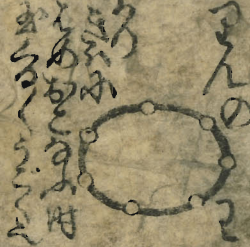
鬚品弓品 如笑和合且

ひまのりあさんの中

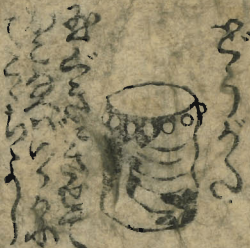
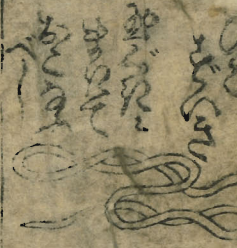
国中らんらん 八圓の



つひの中



つひの中



つひの中

